

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展3 畠田和一が採 集していた岡山県の絶滅種2」

会期：2020年10月10日(土)～2021年3月28日(日)

内湾の潮下帯（水深5～30m）の砂泥底に棲む種

展示する種（14種）：イワカワチグサ，ヤツシロガイ，カズラガイ，ホソオリイレボラ，ミクリガイ，トウイト，ナガニシ，マクラガイ，リュウグウボタル，アワジタケ，ハンレイヒバリ，アオサギ，アワジチガイ，ウスベニマスオ。

これらの種が岡山県から消え去った最大の理由は、海底の過剰な浚渫しゅんせつと考えられる。例えば現在の水島工業地帯は、その沖合の海底からサンドポンプで巻き上げた砂を用い、海岸線を埋め立てることで造成された。また同時に、高度経済成長期には海砂の需要が安価なコンクリート材料として飛躍的に高まり、岡山県を含む瀬戸内海中央部の海域各地で、盛んに砂の浚渫と採取がなされた。これを行うと海底の地形自体が大幅に変形し、そこに棲息する生物すべてを根こそぎ死滅させるばかりか、砂を削り取った跡地には巨大な掘り鉢状の陥没がいくつも生じる。その底が深い場合は陽光が届かず、腐敗して無酸素状態となり、嫌気性細菌によって硫化水素など毒性の強い物質が発生する。これが荒天の時などに攪拌かくはんされ、底から巻き上げられて表層に出てくる。この結果、穴の奥底のみならず外においても多くの生物を死滅させ、あるいは生態系の平衡へいこうを崩壊させて赤潮などが頻発ひんぱつする。この繰り返しで、1960～80年代という比較的短期間のうちに、多くの種が耐えられず滅び去ったとみられる。(岡山大学 福田宏)

イワカワチグサ

Cantharidus urbanus (Gould, 1861)

(腹足綱：古腹足亜綱：ニシキウス目：ニシキウス上科：ニシキウス科)

展示標本： #5622 備中 [笠岡市] 飛島

房総半島・男鹿半島以南，南西諸島，朝鮮半島に分布する。太平洋側・日本海側ともに，西南日本の潮間帯下部から潮下帯に普通に見られ，砂泥底に生じたアマモ場の海草上などに群がり，内湾環境においても場所によっては多産する。瀬戸内海では全域を通じて普通に産し，例えば広島県芸南地方では近年も棲息が確認されている。通常は砂浜に殻が打ち上げられるのに加えて，潮下帯でのドレッジや採泥器などでも容易に採集できる種であり，本種がレッドリストに取り上げられるのは他県では到底考えられないことである。

しかし岡山県では，ここに展示した畠田の標本だけが産出の確かな証拠であり，それ以外は信頼できる文献記録も標本も存在せず，過去 20 年間で破片一つすら見出されていない。この状況は異様というほかなく，1960 年代以降の本県における海底環境の悪化がいかに凄まじいものであったかを反映している。

本種は掛け流し式の水槽内でも容易に次世代が出現することから，恐らく直達発生か，ま

たは浮游幼生期がごく短いと考えられる。したがって必然的に分散能力は著しく低いとみられ，一旦水質悪化等で繁殖循環が絶たれると，たとえ隣接海域に個体群が維持されていたとしても新規加入は望めない。岡山県の本種はもはや絶滅し，今後復活する兆しも今のところない。



ヤツシロガイ

Tonna luteostoma (Küster, 1857)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：ヤツシロガイ上科：ヤツシロガイ科)

展示標本： #644 [備前市日生町] 鹿久居島

太平洋側・日本海側とも北海道南部(函館)から九州まで広く分布する。国外は朝鮮半島、中国、台湾、ベトナムなど東南アジア一帯、ハワイ諸島周辺、ニュージーランド、南アフリカと相互に遠く離れた海域から知られているが、それらの間からは明確な記録が少なく、それぞれが遺伝的に孤立した集団を形成している可能性もある。内湾・外洋を問わず潮下帯～漸深海底(水深約220mまで)の砂泥底に棲み、多産する場所では死殻が砂浜に打ち上げられのみならず底引き網などで頻りに混獲される。食用とされることは少ないが、殻が料亭などで置物として利用されているのを頻りに目にする。ナマコ類など棘皮動物を好んで捕食する。

日本の多くの海域では今も普通種で、レッドリストへ含められた例はこれまでにない。このためナガニシなどと同様、保全対象種となるイメージを想定しづらい種であるが、瀬戸内海中央部では本種はもともと極めて稀産で、岡山・香川両県では本種の産出を明記している文献は見当たらない。

岡山県での唯一の産出の証拠はここに展示した畠田標本である。この個体は殻長150mmに達する堂々たる成貝で、殻表はさほど摩滅しておらず殻頂の胎殻も完全で、殻皮も一部が剥離したのみであるが、殻口内部の光沢はやや失われているため畠田が入手したとき既に死殻であったと考えられる。この個体が岡山県における本種の最初にして最後の標本であり、以後は今に至るまで破片すらも見出されたことはない。

恐らく本種は1950年代までの、まだ大規模な人為的攪乱を被る前で多様な貝類相が存在した本県内にごく少数が棲息していたものの、その後の水質汚濁や海底浚渫などによって多くの種が絶滅または激減したのと同時期に、完全に本県から姿を消したと考えられる。

本種を含むヤツシロガイ科の多くの種は浮游幼生期間が長く、分布域も広いことで知られるため、いずれ本種も他の海域から幼生が入り込んできて新たな個体群を本県内に形成する可能性も皆無とは言えないが、少なくとも現時点では近隣の香川県や広島県でも棲息の確実な情報がないため、もし畠田標本に次ぐ個体が岡山県に現れるとしても長時間を経た環境回復の上で初めて起こりうることである。



カズラガイ

Phalium variegatum (Perry, 1811)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：ヤツシロガイ上科：トウカムリ科)

展示標本： #528 備前〔倉敷市下津井〕六口島

本種には、形態的に識別可能な2型（主に内湾に産するカズラガイと、外洋に産するナガカズラ）が存在する。研究者によっては両者を同種とする場合があるが、ここでは互いに別種と考えて区別する。岡山県で確認されているのはカズラガイのみである。

カズラガイは北海道南部以南、九州までと、少なくとも韓国、中国、フィリピンに産することが確認されている。内湾の潮間帯下部から潮下帯にかけて細砂底に産し、本来は頻繁に見られた普通種であった。しかし近年は全国各地で減少傾向が指摘されている。海底環境の悪化だけでなく、他の賊腹足類の種と同様、インポセックスが影響した可能性がある。

瀬戸内海では1980年代以前、東西の湾口部ではごく普通であった一方で、中央部では当時既に「少ない」とされていた。その後さらに急減し、広島県芸南地方では2004年の時点で「採集した標本は半化石状態のもので、現在も生貝が生息しているかは不明」と報告されている。香川県では1977年刊行の文献では三豊海域から記録されているものの、近年の報告例はない。

岡山県では文献記録はなく、ここに図示した標本のほか、やはり畠田コレクションに現存する「備中〔浅口市寄島町〕安倉」（1個体、#531）だけが産出の証拠の全てである。展示した標本は蓋付きのため生貝を得たものと推測され、もう一つの安倉産も摩滅や褪色は見られず、いまだに殻口から腐肉が出てくるので、恐らく漁屑中に見出されたものであろう。これら以外に県内での記録も標本もなく、死殻や破片も全く見出されていない。したがってヤツシロガイなどと同様、1960年代以降の水質汚染（特に環境ホルモン）や海底浚渫など激的な環境悪化によって、もともと岡山県では少なかった本種は絶滅したものと考えられる。



ホソオリイレボラ

Trigonaphera amakusana Petit, 1974

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：ガクフボラ上科：コロモガイ科)

展示標本： #502 児島郡甲浦村宮ノ浦 [現・岡山市南区宮浦]

九州からいくつか産出記録があり、潮下帯の砂底に産するとされるが、具体的な産出記録に乏しいため分布の全貌や棲息環境の嗜好性は不明な点が多い。瀬戸内海ではこれまでに香川県荘内半島周辺～坂出沖、山口県柳井市、大分県別府湾などから記録されているが、本種に近縁で形態が近似し、瀬戸内海のみより広範囲に産出するヘソアキホソオリイレボラやオリイレボラと混同されていた可能性が高く、過去の文献記録を鵜呑みにはできない。岡山県では1958年に倉敷市塩生のサンドポンプで本種が記録されたが、これも本当に本種を指していたかは定かでない。

しかし、畠田コレクションには、「児島郡甲浦村宮ノ浦」(現・岡山市南区宮浦)産のオリイレボラ3個体に混じって、本種に同定可能な個体が1つだけ現存する(ここに展示したもの)。この標本は本種もオリイレボラも彩色や光沢がほぼ失われて灰色の化石状となった古い死殻である。1959年に児島湾が閉め切られる以前には、宮浦周辺に広大な泥干潟が存在していたため、同地にオリイレボラの個体群が存在した可能性が高く、本種も同所的に棲息していたものと推測される。しかしこの1個体以外には産出記録や標本がなく、近年も一切確認されていないことから、岡山県での本種はもともとオリイレボラやヘソアキホソオリイレボラよりはるかに稀産であり、その後の棲息環境の消失によって完全に絶滅したと考えられる。



ミクリガイ

Siphonalia cassidariaeformis (Reeve, 1846)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エソバイ上科：エソバイ科)

展示標本： #842 備前〔倉敷市〕下津井

陸奥湾以南の太平洋・日本海両岸に九州まで分布し、沖縄、台湾、朝鮮半島、中国北部からも知られる。外洋・内湾を通じて潮間帯下部から潮下帯の砂底に棲む。本来は多産し、肉食性のため蛸籠で一網打尽に漁獲して食用に供されていた。しかし近年は各地で激減が報じられ、相模湾では「底刺網によって 1970 年代には大量に採集されたが、最近では、ほとんどみられなくなった」と報じられ、その原因は「有機スズ化合物によるインボセックス」(ナガニシの解説を参照)とされる。九州玄界灘に面した福岡県福岡市(現・福津市)でも「1970 年代半ばを境に激減」したとされている。瀬戸内海でも 1980 年代前半までの時点では全域に多産するとされていたのに、例えば広島県芸南地方では「1970 年代前半まで全域」に見られたのに対し、2004 年ごろの時点では「どこも確認できない」とされた。香川県でも 1970 年代には三豊海域で「多い」とされたが、近年の調査では見出されていない。

岡山県では 1968 年に倉敷市塩生のサンドポンプで記録され、1970 年代刊行の目録にも掲載されている。畠田コレクションにはここに展示した下津井産のほか、「〔浅口市〕寄島」

(「〔昭和〕31 [= 1956].11.21.」, 1 個体, #1776;「昭和 35 [= 1960].12.4.」, 1 個体, #2557), 「備中〔笠岡市〕白石島」(1 個体, #848) の各標本が現存し、かつては確かに少なくなかったことを今に伝えている。このうち下津井産個体は殻口内の光沢が強く、奥からいまだに肉片が出てくることから、港に揚げられた漁屑中から生貝を得たものであろう。

しかしその後は他県と同様に生貝が全く見出されなくなり、近年はかろうじて、笠岡市夏目の砂浜打上、及び同市五番町の漁港の漁屑から、いずれも著しく古い化石様の死殻計 3 個 (2002・2018 年) が得られたほか、玉野市波張崎沖 (水深 14.3 m, 砂底) でのドレッジによって、体層の一部のみであるもののなんとか本種と同定可能な破片 4 個が採集されたのみである。それらを見る限り、現在の岡山県の海底に本種が棲息している雰囲気は全く感じられない。恐らくはヤツシロガイやカズラガイ等ともども、1970 年代以降に改訂浚渫による棲息環境の破壊と、インボセックスが致命的な打撃となり、絶滅したと考えられる。



トウイト

Siphonalia fusoides (Reeve, 1846)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エソバイ上科：エソバイ科)

展示標本： #2596 [浅口市] 寄島

太平洋・日本海両沿岸とも北海道南部から九州まで分布し、国外は朝鮮半島、中国、ベトナムから知られる。ミクリガイと同様に潮間帯下部から潮下帯の砂底または砂泥底に棲むが、内湾では本来、本種の方がより多く見られた。例えば 1970 年代までの瀬戸内海周防灘では本種は多産していたものの、ミクリガイはほとんど見られなかった。

かつて本種は底引網などで頻繁に混獲され、漁港に多数が廃棄されて転がっていた。しかしミクリガイ同様 1980 年代ごろを境に各地で激減し、やはり有機スズに起因するインボセックスに罹患して激減したと考えられている。広島県芸南地方でも今世紀初頭には、ミクリガイと同様に本種も「古い死殻」しか見られなくなったとの報告がある。香川県でも 1970 年代には三豊地域で「普通」とされているのに対し、最近の調査では確認されていない。したがって本種は瀬戸内海の大半の海域において、最近 40 年間でほぼ消滅したと考えられる。

岡山県では 1970 年代刊行の文献にミクリガイと並んでその名が見えるのが唯一の記録であるが、畠田コレクションにはここに展示した個体及び「[笠岡市] 大飛島」(1 個体, #838) の両標本が現存する。両者とも殻口内の光沢が失われているため死殻を採集したものとみられ、またミクリガイより標本数が少ないことから、かつての岡山県では本種はミクリガイほど多産しなかったものと推測される。近年もミクリガイが破片や極端に古い死殻だけは得られているのと対照的に、本種は痕跡すら一切見出すことができない。ミクリガイの個体群存続がほぼ絶望視される現状では、本種が今も岡山県内に棲息している可能性はより一層低いと考えざるをえない。



ナガニシ

Fusinus perplexus (A. Adams, 1864)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：エソバイ上科：イトマキボラ科)

展示標本： #2561 [浅口市] 寄島，昭和 35 [= 1960].12.4.

北海道南部及び男鹿半島以南，九州南部までの太平洋・日本海両岸に分布し，国外は韓国から知られる。内湾・外洋を問わず潮下帯から漸深海底にかけて（水深 10-200 m）の砂底または砂泥底に産し，生貝は底引網などで得られ，死殻は頻りに海岸へ打ち上げられる。食用目的で魚市場や鮮魚店店頭に並ぶこともあれば，漁港に廃棄された漁屑中に見る機会も多い。他の海域では現在も普通に見られる印象が強く，一般的な感覚ではレッドデータブックの掲載対象となるとは考えにくい種である。ただし近年，三河湾・伊勢湾では「ほとんど生貝が確認できない期間があった」と報じた文献もあり，実際には少なくとも一部の海域で減少傾向にある可能性が否定できない。

岡山県では畠田和一が 1930 年代に，本種が「[岡山市南区] 小串，[同市東区] 寶傳，[浅口市寄島町] 安倉」で「ヨナキ」，「[倉敷市] 下津井，[笠岡市] 伏越，[同市神島] 外浦」で「ヨナキニシ」という方言で呼ばれていたことを記録しており，当時は地元住民にも存在が広く認知されていたことが窺える。その一方で現存する標本はわずかしかなく，畠田コレクションに含まれる「備中寄島」（「1956. 2」，#996），「寄島」（「[昭和] 31 [= 1956].11.21」，#1768）及びここに展示した 1 個体の計 3 個体にとどまり，それら全てが殻皮も色彩も失われて化石様に白化した古い死殻である。このため戦前までは本県でもごく普通に見られたものの，1950 年代には既に生貝を得るのが容易でなくなっていた可能性もある。その後は県内での消息が不明となり，少なくとも 21 世紀に入ってからの 20 年間では死殻や破片すら一切見出されなかったことがない。また本県対岸の香川県三豊海域では 1970 年代まで，本種が「普通」に見られたと文献にあるのに対し，2009～2013 年に同県で実施されや調査では確認されておらず，やはり岡山県と同様に消滅またはそれに近い状況にあるらしい。

これらを総合すると岡山県とその近隣海域での本種は，棲息環境や食性などが共通するヤツシロガイ，カズラガイ，トウイトなどととともに戦後激減し，遂には絶滅に至ったと考えられる。今なお本種が普通に見られる地域での状況を考えるとこれは驚愕すべきであるが，岡山県では高度経済成長期から 20 世紀末にかけての海岸線の埋め立てや護岸など海岸線改変の進行，工業・生活排水の垂れ流しによる著しい水質汚濁，過剰な海砂採取による海底陥没と有毒な貧酸素水の発生，船底塗料に用いられていた有機スズに起因するインボセックス（その被害が最も顕著に現れる新腹足目に本種は属す）など複数の要因が同時期に重なって，県内の本種の個体群は壊滅的打撃を被り，近隣他県からの新規加入にも依然として成功していないものと考えられる。本種がこのようなカテゴリに含められねばならないことは，岡山県の海域における生物多様性の低下が他県と比べていかに甚大かつ悲惨であったかを象徴している。



マクラガイ

Oliva mustelina Lamarck, 1811

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：マクラガイ上科：マクラガイ科)

展示標本： #1062 [瀬戸内市] 牛窓町筵江浜, S8 [= 1933].6.28.

青森県八戸と男鹿半島以南，九州まで知られるが，また宮城～茨城県の間では報告例がないことから，八戸での産出は津軽海峡を経て日本海から太平洋に流入する対馬暖流末端の影響化に生じたと推測される。沖縄からも記録はあるが実際に産するか否かは定かでない。国外は朝鮮半島，中国（黄海南部～海南島），台湾，ベトナム，タイ，マレーシア，シンガポール，インドネシア，フィリピンまで分布する。

砂質干潟の低潮帯から潮下帯に産し，かつてはごく普通種であった。瀬戸内海でも1970年代前半頃までは大潮の干潮時に干潟表層を多数の生貝が匍匐する様子が観察できた。近年も外洋に面した海岸の潮下帯には個体群が残存するものの，内湾域では激減し，特に潮間帯でほぼ壊滅的である。ナガニシの解説で述べたのと同様に本種も賊腹足類の一員であるため，有機スズがもたらしたインポセックスによって急減した可能性が論じられている。香川県では近年の調査で「新鮮な死殻は全く採集されなかった」とされ，殻表が激しく摩滅してチョーク状に白化し尽くした，見るも無残な死殻のみが報告されている。

岡山県では畠田コレクション中に，ここに展示した個体のほか，「[浅口市] 寄島」(「[昭和] 31 [= 1956].11.21. 採集品」，1 個体，#1779) からの標本が含まれている。特に展示した筵江浜産個体は光沢も色彩もよく保存され，肉抜きしきれなかった肉片が殻口から出てくるため採集時は生貝であったと考えられる。しかし近年は生貝はおろか新鮮な死殻すらも全く見出されなくなり，殻表が擦れて赤褐色の下層が露出した古い殻がたまに転がっているのみである。2018年には笠岡市の漁港に揚げられた漁屑中から，殻頂が飛んで大きく円い穴がぽっかり開き，色彩を一切欠く殻だけが得られた。本種は潮間帯にも多産する種であるため，本来なら少なくとも新鮮な殻が浜に打ち上げられるはずである。それが全く見られないばかりか潮下帯においても極端に古い殻しか見られないのは，既に完全に絶滅したことを示すと捉えざるを得ない。香川県でも同様の状況であることから，もはや瀬戸内海中央部に本種は生存していない可能性が濃厚である。



リュウグウボタル

Amalda albocallosa (Lischke, 1873)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：マクラガイ上科：リュウグウボタル科)

展示標本： #1059 備前 [倉敷市下津井] 六口島沖

太平洋側は房総半島以南，日本海側は山口県北長門海岸以南，どちらも九州まで分布し，韓国南部にも産する。中国沿岸及びベトナムでも記録があるが，それらは別種の可能性がある。潮下帯から漸深海底にかけて砂泥底に棲息し，漁屑に混入していることが多い。主に外洋に産するイメージが強い種であるが，本来は瀬戸内海でも決して稀ではなく，特に山口県周防灘では多産し，1970年代には周南市徳山の鮮魚店の店頭で防府市佐波島近海で漁獲された生貝が連日大量に並べられて1個体8円で売られていた。ただし近年は減少傾向にあり，広島県芸南地方で2004年に刊行された文献では倉橋・仁方・下蒲刈・蒲刈各町での底引き網で得られた本種を記録しているが，そのうち生貝は仁方町だけで，あとは全て死殻であったとされている。

岡山県では瀬戸内市牛窓町からの文献記録があり，畠田コレクション中にもここに展示した六口島沖の標本が現存する。この個体は本種としては著しく小さく，若干の褪色と軸唇の破損が見られるため死殻を採集したものと考えられる。畠田がラベルにわざわざ「沖」と記しているのは，この個体が出津井港揚がりの漁屑由来という意味であろう。

本種はこの標本以降，岡山県では全く確認されていない。本種は周防灘ではヤツシロガイ，カズラガイ，トウイトなどと随伴し，これらの種が同時に見られるのが通例であったが，岡山県では今挙げた3種全てがもう50年以上一度も見出されておらず，ことごとく絶滅したと見なさざるを得ない状況である。本種もそれらの種と運命をともにして，1960年代以降に本県から滅び去ったものと考えられる。



アワシタケ

Strioterebrum japonicum (E.A. Smith, 1873)

(腹足綱：新生腹足亜綱：吸腔区：賊腹足上目：新腹足目：イモガイ上科：タケノコガイ科)

展示標本： #1263 備中〔浅口市〕寄島，1956.2.

太平洋側の北限記録は房総半島の千葉県勝浦市鵜原，日本海側は山形県鶴岡市堅荅沢で，それら以南，瀬戸内海まで記録がある。国外からは知られておらず，恐らく日本固有種。外洋・内湾を問わず潮下帯の砂泥底に棲息する。

岡山県ではこれまで，東海大学自然史博物館所蔵の野口博コレクション中に「備前」産の1個体が知られていたのみであったが，畠田コレクションからもここに展示した寄島産個体のほか，「〔倉敷市下津井〕六口島」(1個体，#2246)，「〔倉敷市玉島〕黒崎村沙美」(「昭[和] 10 [= 1935].2.3.」，1個体，#5995)，「寄島」(「〔昭和] 31 [= 1956].11.21.」，3個体，#1794)からの合計6個体が現存する。そのうち今回展示した寄島産1個体のみが殻口内部の光沢が残り，採集時に生貝であった可能性があるのに対し，それ以外は全て摩滅または褪色した死殻である。同時に採集された他の種の顔ぶれや殻の状態から判断して，#5995の沙美産のみ砂浜での打ち上げで得られ，他は漁屑由来であろう。畠田が活躍した1950年代以前においても生貝や新鮮な死殻が頻繁に得られていたわけではないことが窺える。

その後は上記野口コレクションの記録を除いて有力な情報がない。かろうじて2002年に玉野市波張崎南東沖(水深22m，泥底)及び大入崎～岡山市東区犬島間(10m，砂底)で実施されたドレッジにより，微小な幼貝の死殻3個と破片1個が得られたが，これらは同定もままならないほど劣化が激しい。

畠田標本のうち寄島産の本種は，ミクリガイ，トウイト，ウスベニマスオ，アワシチガイ，アオサギなどどれも戦後の岡山県で絶滅したと考えられる種と同時に採集されており，本種もそれらとともに潮下帯の環境悪化によって本県から滅び去ったと考えられる。



ハンレイヒバリ

Modiolatus hanleyi (Dunker, 1882)

(二枚貝綱：翼形亜綱：イガイ目：イガイ上科：イガイ科)

展示標本： #4561 備前 [倉敷市下津井] 六口島

太平洋側は房総半島以南，日本海側は福岡県玄界灘・響灘以南，九州南部までと，朝鮮半島，中国黄海沿岸，ベトナム，タイランド湾及びシンガポールから記録がある。内湾湾口部の潮通しのよい場所にある清浄な細砂干潟の下部～潮下帯において，砂底表層に繭状の巣を作って横たわる。同所的にクイチガイサルボオ，オオトリガイ，フジナミ，ムラサキガイ等が産することが多いが，それらの種よりももともと個体数・産地数とも格段に少なかった。しかもそれらのうち後 3 種も今や干潟環境の消失・悪化に伴って全国的に強い減少傾向にあり，本種はそれらにもまして稀少化が甚だしい。山口県周防灘や福岡県玄界灘・響灘沿岸は数少ない本種の産地として知られてきたが，これらの場所でも近年は生貝の報告例が極端に減り，殻皮が完全に失われて真っ白になった半片がたまに拾われる程度である。香川県でも近年は「非常にまれな種であり，丸亀市土器川河口前浜から破片が得られたのみであった」と報告されている。瀬戸内海では全域で絶滅寸前の状態にあることは疑いがない。

ここに展示した六口島産の畠田標本は，現存する唯一の岡山県産個体であり，殻長 80 mm と老成しており，殻皮や内面の真珠光沢の劣化も見られず，採集時は生貝または死亡直後であったにちがいない。しかしその後本種は県内から破片すらも確認できていない。往時は本種よりもはるかに普通に見られたはずの多くの種ですら絶滅または絶滅寸前の状態にある現今の岡山県において，本来的に低密度で存在していた本種が個体群を維持している可能性は限りなく低い。



アオサギ

Psammacoma fallax (Bertin, 1878)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：ニッコウガイ科)

展示標本： #1696 [浅口市] 寄島, 1956.12.2.

太平洋側の北限は房総半島，日本海側は能登半島で，九州南部まで分布し，国外は中国，フィリピン，インドネシア，アンダマン海，インドを経てアフリカ東岸のタンザニアまで及ぶ。大規模な内湾奥の潮下帯（水深約 10～80 m）の泥底に特異的で，浜辺へ打ち上げられることは少なく，かつてはサンドポンプなどで海底からもたらされた砂の中や，底引網の漁屑中に時折混入していた。しかし近年はアワジチガイと同様に全国で極端に減少し，目にする機会がほとんどなくなってしまった種である。今世紀に入ってから瀬戸内海では，例えば広島県芸南地方や香川県沿岸でも死殻しか報告されていない。

岡山県では畠田コレクションにここに展示した個体に加えて，やはり浅口市寄島で「[昭和] 31 [= 1956].11.21.」，合弁 1 個体・半片 2 個，#1782, 1784;「1956.12.」，合弁 1 個体，#4008）と 1956 年初冬に集中的に採集された複数の標本が含まれている。合弁個体の一部は光沢や靱帯もよく保存され，採集時は生貝もしくは死亡後まもない状態であったと考えられる。本種と同時にハナツメタ 27 個体，ハナムシロ 21 個体，モミジボラ 171 個体など潮下帯泥底に多産する様々な種が採集されていることから，恐らくはそれらの全体が，寄島漁港に水揚げされた漁屑に由来するのであろう。特にモミジボラの大半は生貝でありながら殻表が真っ黒に染まっていることから，棲息していた海底はかなり富栄養で還元的な環境であったと推測される。

これら畠田標本以降，本種が県内で見出されたという確実な情報や証拠の標本は一切ない。同時に，この寄島産の標本一式には本種と同様，その個体を最後に県内で再発見されないままの種がいくつも含まれている（やはり今回展示したナガニシ，アワジタケ，ウスベニマスオ，アワジチガイなど）。つまり 1956 年当時に寄島町沖の潮下帯で見られた貝類相はその後著しく多様性を低下させ，多くの種が消滅したことは明らかである。本種やアワジチガイはもともと，湾奥で自然に絶妙なバランスの上に形成される富栄養かつ還元的な泥底を好んで棲息していたと考えられるが，同様の場所は往往にして海岸に近いため埋め立てなどで物理的に破壊されやすい上に，市街地や工場群から流入する汚排水の影響をもろに被り，赤潮や化学物質などの直撃を受けて短期間で壊滅した可能性が高い。今も岡山県のどこかに本種が生き残っていると考えるのは困難である。



アワジチガイ

Sylvanus liliium (Hanley, 1844)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：ニッコウガイ科)

展示標本： #1764 [浅口市] 寄島, 1956.11.21.

太平洋側は房総半島以南、日本海側は能登半島以南、九州まで分布し、国外は中国沿岸、タイ、シンガポール、フィリピン、オーストラリア北部から知られる。アオサギと同様、大規模な内湾奥の潮下帯（水深約2~100m）の泥底に特異的で、かつてはこれら2種が同時に確認される機会が多かった。そして現在は両種ともに国内から姿を消しつつある。

明治以降の日本の文献を回顧すると、淡路島では何度も繰り返し記録されているが、同島周辺以外の瀬戸内海沿岸では戦前（1930年代）の広島県で「倉橋島」のみ、戦後（1950年代）の山口県で「広島湾、小野田」のみが産地として挙げられており、もともと産地が局限されていたらしい。最近50年間ではもはや滅多に目にすることのできない種と化し、例えば近年の広島県芸南地方では仁方・下蒲刈・蒲刈各町において「死殻の半片ばかりで生貝を確認できない」とされている。

岡山県では文献記録はないものの、畠田コレクション中に今回展示した標本とともに寄島産の複数個体（「1956.12.2.」, 半片2個, #1697; 「[昭和] 31 [= 1956].11.21.」 合弁8個体・半片4個・破片1個, #1783, 1788）が現存し、これはアオサギの解説でも触れた、寄島港揚がりの漁屑由来と推定される様々な種の標本と同じロット中に含まれている。これらの標本は、かつて岡山県内に確かに本種が棲息していたことを証明する唯一の証拠である。これ以降はアオサギともども、本種は一度たりとも県内で見出されたことがない。1950年代半ばまでは、浅口市附近の岸辺からそう遠くない浅海底に両種の個体群が存続していたことは確実であるが、高度経済成長期の乱開発と海底浚渫並びに水質汚染によってことごとく死滅したと考えられる。

本種とアオサギは環境省のレッドリストには未掲載であるが、岡山県のみならず他の都道府県でも減少傾向が著しい（本種は千葉・愛知・熊本各県のレッドリストで絶滅危惧Ⅰ類、福岡県で絶滅危惧Ⅱ類、アオサギは千葉県と大阪府で絶滅、愛知・熊本両県で絶滅危惧Ⅰ類、福岡・長崎両県で情報不足とされている）。このため、早急に全国レベルでの稀少性評価と保全対策が必要である。



ウスベニマスオ

Gari pallida (Deshayes, 1855)

(二枚貝綱：異齒亜綱：不完全齒上目：ザルガイ目：ニッコウガイ上科：シオサザナミ科)

展示標本： #1765 [浅口市] 寄島, 1956.11.21.

分布北限は太平洋側が岩手県大槌湾と陸前高田市松原, 日本海側が新潟県中・下越地方で, 九州までの沿岸各地で記録がある。国外は朝鮮半島, 中国, 台湾, ベトナム, フィリピン, ニューギニア, 北オーストラリア, インドネシア, シンガポール, アラビア湾, アデン湾, 紅海, シブチ, ザンジバル, マダガスカル, 南アフリカまで分布する。また, 本来は分布していない地中海へも, やがてスエズ運河経由で侵入するであろうと予見されていたところ, 最近(2018年) ついにイスラエルでの産出が認められた。

内湾・外洋を問わず潮下帯～漸深海底(水深約 10～150 m で, 30～60 m に最も多い) に産し, 底質の嗜好は幅広く, 粗砂底・細砂底・泥底のいずれでも見出される。ただし内湾奥部では少なく, 多少とも潮流の流れがあって海水が入れ替わる場所をより好むため, 瀬戸内海では決して多産はしないものの, 海底からの浚渫砂や漁屑・蛸壺などに時折混入し, 近年も広島県の仁方・下蒲刈・蒲刈各町の底引網で確認されている。

岡山県では文献記録はなく, 今回展示した畠田コレクション中の寄島産半片 1 個が, 現時点で唯一の確実な産出の証拠である。この個体は腹縁が欠け, 色落ちも激しい古い死殻で, そのような傷んだ標本しか現存しないことを考えると 1950 年代当時であっても本種は県内では稀産で, 採集は容易でなかったと推測される。そしてこの個体以降, 本種は県内で一切確認されていない。上記個体は大量のハナツメタ, カゴメガイ, ハナムシロ, モミジボラとともに, やはり県内最後の記録となったアワジタケ, アオサギ, アワジチガイなどとともに採集されており, やや富栄養で還元的な潮下帯の泥底から水揚げされた漁屑に由来すると考えられる(アオサギ・アワジチガイの解説を参照)。現在の県内でこのような種構成が見られる場所は知られておらず, 本種もアオサギなどとともに水質悪化や海底浚渫による棲息環境の破壊の直撃を受けて, 1960 年代以降に県内から一旦絶滅したと見なさざるをえない。

ただし本種は分布域が著しく広く, つまりそれだけ浮游幼生の分散能力も高いため, スエズ運河を経て地中海へ侵入を果たしたのと同様, いずれ太平洋から岡山県へ辿り着いて新たな個体群が形成されないとも言えない。ただその場合の個体群はかつて県内に存在したものと別物である。定着が可能となるには潮下帯の環境状態が十分に回復していることも必須であるが, それには今後長い時間を必要とするであろう。

